

高橋是清とチャールズ・ウォルコット・ブルークス

三原 浩

米欧亜回覧の会の有志 20 名による 2005 年の長州歴史旅行は、日銀下関支店の見学から始まった。高橋是清が初代支店長だったと聞き、岩倉使節団との関連を知りたいと思った。是清についての私の知識は、日露戦争の戦費調達のため、英米での外債募集に成功したこと、赤字公債などの高橋財政により昭和初期の金融恐慌を乗り切ったこと、最後は 2・26 事件で反乱軍の凶弾に倒れたこと、程度であった。春帆楼、壇ノ浦、功山寺などを回り、一泊目の萩の常茂恵での夕食のとき、伊藤博雅氏の隣に座らせていただき、氏の直系の曾祖父が伊藤博文、母方の曾祖父が高橋是清であることを知り、是清の自伝は面白いですよと教えて頂いた。

是清は 1854 年、幕府ご用絵師の子として芝で生まれ、仙台藩足輕高橋是忠の養子となった。1864 年、藩から横浜に派遣され、ヘボン博士の塾で英語を学んだ。1867 年勝海舟子息小鹿、仙台藩士富田鉄之助（のちの日銀第二代総裁）に随行して米国へ派遣されたが、人身売買の契約書とは知らずに書類にサインしたため、数ヶ月間オークランドで牛馬を友として働かされる羽目となる。やがて、戊辰戦争のニュースが届き、帰国しようとしたが、奴隷の身分では叶わず、サンフランシスコの日本の領事を委嘱されていたブルークスに訴え、その仲介により契約を破棄することができた。1868 年、是清まだ 14 歳の少年である。12 月横浜に帰着したが仙台藩は賊軍となっていたので苦勞して身を潜め、やがて森有礼の書生となり、16 歳で開成学校（大学南校、今の東大）の教官の助手となった。森は海外留学から帰国して間もない頃で公議所の議長心得となっていたが、廃刀案が否決され、辞職して一時鹿児島に帰ることになった。その時、森は南校の教頭に就任していたフルベッキに是清のことを頼んでいる。フルベッキは岩倉使節団の青写真、ブリーフ・スケッチを書いたオランダ生まれの宣教師としておなじみの名前である。是清はフルベッキの屋敷内に住み、歴史や聖書の講義を受け、生涯の精神的指針を授けられた。

酒豪の是清は最初の渡米の下等船室で、富田から貰った 20 ドルでは足らず、同行の友人の分までまきあげて飲んでしまったという。17 歳の頃には芸者遊びをおぼえ、放蕩のあげく一文無しとなり、教員を辞め、一時は箱屋（三味線の箱を担いで芸者の送り迎えをする）にまでなった。その後、唐津に出来た英語学校で教えていたが、1873 年 19 歳のとき東京に戻り文部省に入った。岩倉使節団が出発した後である。1881 年農商務省に移り、ここでは「殖産興業の父」前田正名に私淑することになる。1885 年是清は専売商標保護に関する法律調査のため、欧米に出張し、オークランドを再訪しているが、この年は伊藤博文が初代総理大臣に、森有礼が文部大臣に就任した年である。1887 年是清は初代特許局長となったが、前田の懇請により農商務省を辞し、ペルー銀山開発のため 1889 年現地へ赴いた。ところが此れが完全なペテンのような話で、1890 年後始末のうえ帰国し又も無一文になった。

前田も逆境にあったが、責任を感じ、是清を川田日銀総裁に紹介した。丁度日銀本店（重要文化財）の新築工事が始まっており、設計者の辰野金吾が技術部監督であった。辰野は是清が唐津で英語を教えた生徒であったが、その下の事務主任として1892年日銀に入行した。工事現場での抜群の働きで川田総裁の信用を得て、是清は1893年日本銀行支配役となり、大阪支店に次ぐ二番目の支店として新設された馬関支店（西部支店）の支店長となった。（馬関は下関の平安時代からの古称「赤間関」を「赤馬関」と表記したことから。）今回の旅行で日銀の次に見学した春帆楼で、日清講和条約の交渉が始まったのが1895年3月20日である。是清は最終日の4月17日に旧知の陸奥宗光が発熱して講和会議に出席できないと聞き、宿舎に見舞いに行っている。また、伊藤博文には記念の揮毫を依頼している。是清は同年秋、横浜正金銀行に転じて東京に戻り、1897年には副頭取となった。1899年日銀に戻り、副総裁に就任し、1904年日露戦争が始まると、戦費調達のための外債募集に大活躍した。是清の口述自伝は、波乱万丈の84年の生涯の前半約50年のこのあたりで終わっている。その後、日銀総裁、蔵相を6回、総理を2回歴任する是清の財政家としての後半の人生の起点は、この下関にあったということが出来ると思う。

さて、この文のもう一人の主演ブルックスは、前述の通り1868年には是清を助けているが、さかのぼって1860年には50数日間にわたり咸臨丸の一行の面倒を見ている。Charles Wolcott Brooksは1833年、ボストン郊外のMedfordで生まれ、フランスで教育を受け、1854年頃サンフランシスコをベースとしてハワイとの貿易で成功していた。彼は何故か日本人に対して親愛の情を持ち、咸臨丸の乗組員で到着前後に死亡した峯吉、源之助、富蔵の墓を作り、峯吉（MU-NAY-KIE-TCHEE）の英語の墓碑には彼の名前が刻まれている。また彼は比較言語学や民族学に興味を持ち、咸臨丸に西海岸のインディアンの少年を連れて行き、福沢諭吉に日本語とインディアン語を比較してもらい、Evening Bulletin紙にその結果を発表している。さらに、17世紀以降北太平洋沿岸各地に漂着した60件の日本漁船の遭難の詳細を調べ、小論文にまとめ、1876年カリフォルニア科学アカデミーで発表している。インディアンは人種的にモンゴル系であり、黒潮のおかげで日本人の血がかなり流れ込み、言語的にも共通性があるということを証明したかったようである。

ところで、咸臨丸といえば、同乗したアメリカ海軍大尉John Mercer Brooke以下11名の助力が大きかったため、ブルック大尉の名が有名になっている。この文ではブルック大尉と区別するため、スペルは似ているが、表記はブルックスで統一した。咸臨丸の世話をした頃、ブルックスは自称日本領事のボランティアで、費用は自腹であった。1867年徳川幕府により正式にサンフランシスコ領事を委嘱され、維新後も新政府により引き継がれた。1870年伊藤博文が大蔵少輔として、財政制度調査のためアメリカへ出張したとき、ブルックスと面会している。久米邦武の米欧回覧実記（岩波文庫）に彼の名前が最初に出てくるのは、第1編アメリカの部で、1872年1月15日岩倉使節団がサンフランシスコの栈橋に到着す

る場面に「日本御雇ノ当港領事官ブロークス氏ハ、旅館ヲ定メ…」とある。次に出てくるのは、アメリカでの最後の訪問地ボストンの章に「帰路ニ同行桑港領事ブロークス氏ノ家ニ立寄りテ去ル、…」とある。そのすぐ前に「エドワルト、ブロークス氏ノ宅ニ至ル」とか「夫ヨリブロークス氏ノ宅ニ至ル」と出てくるが、いずれもブロークスの出身地の親戚の家と思われる。

久米邦武の実記には詳しい記録はないが、ブロークスは使節団一行の16日間のサンフランシスコ滞在中よく面倒を見て、大使の絶大な信頼を得、正式に随行を命ぜられ、ワシントンでの1872年3月11日の第1回会談から7月22日の第11回会談まで第9回を除いて毎回出席している。さらにボストンでは、上記の通り大使一行を自宅や叔父の邸宅に案内している。そして半年以上に亘ったアメリカ回覧を終わり、イギリスに向けてボストンから乗船したオリンパス号の船上で、送別の宴が開かれた。実記の英訳版の注記によると、この時アメリカ側でスピーチをした5人の中にブロークスが入っている。ブロークスはヨーロッパでも使節団に随行したので、送る側だったのか、送られる側だったのか、スピーチの内容が判ると面白いのだが。ここでヨーロッパ回覧中の事件について、参考資料「お雇い外国人-外交12」（鹿島出版会1975年）の41ページの記述を紹介する。

「ところで、随行したブロークスは大使一行がイギリス滞在中、「所労」のため一旦帰国したが、再び一行を追ってドイツで落ち合った。だが、そのころ大使一行のもとに、思いがけない通報が在米森有礼から届いたのである。それはブロークス領事罷免の訓令だった。大使一行がどんなに驚いたかは…（中略）…。森は、大使一行がワシントン滞在中、不遜な態度をあらわにし、会議中、自己の意見が通らないと憤然として席を立ったり、公式の宴を欠席したり等々の行動があつて、一行にとって不快な思いを味あわされた男、それだけにまた、森からの突然の通報を受けた一行の衝撃は大きかったであろうと思われる。しかし、ブロークス自身はその後も岩倉と行を共にした模様で、とうとう日本の地を踏むこととなったのである。岩倉大使の帰朝は明治6年9月13日、おそらくブロークスは随従、来日したのであろう。」

岩倉大使が帰国後副島外務卿に申し入れた結果、ブロークスは1873年10月14日明治天皇に謁見、勅語を賜った。彼の自伝が手に入れば読んでみたいが、十分満足して帰国したことであろう。それは、1876年の前記論文の前文に、外務卿、勝安房海軍卿、伊藤博文工部卿、中浜万次郎、福沢諭吉、畠山良成、高木三郎に対する謝辞が述べられていることから推測できる。1885年52歳で腎臓病のため亡くなった。 以上（2005年6月）

（既述以外の参考資料）「高橋是清傳」小学館1997年、「新版 日本外交史辞典」山川出版社1992年、「アメリカ素描」司馬遼太郎 新潮文庫1986、その他。